



# 月刊 千葉労働動力

## 第七回全支部活動者研修会開催

### 二つの講演と基調提起で 九九年の闘いの方針を確認

一月二四・二五日に第七回全支部活動者研修会(全活)が、群馬県伊香保町において本部・支部三役等五五名の参加で開催された。全活では、第一日目に本部田中書記長が「時代の転換点としての九九年と、結成二十周年を迎える動力千葉の課題」と題した基調を提起し、経済評論家村越一郎氏が「資本主義・

## 国鉄、ガイドライン闘争に起ろう

冒頭基調報告で田中書記長は、九九年の情勢の基本的動向と闘いの基本的な課題、当面する取り組みについて提起した。九九年の様相を歴史の大きな転換点としてとらえ、資本主義体制の未曾有の危機の一層の深刻化が大恐慌過程への突入であること、そこから労働者への一層苛烈な攻撃の激化、団結と権利、労働運動に対する庄殺攻撃の激化が避けられないこと、また戦争の危機が高まっていることを明らかにした。また国鉄闘争と新ガイドライン・有事立法をめぐる攻防戦が、今年にまつたなしの正念場になるという認識と構え

が必要であることを訴えた。その上で九九年の基本的課題として、こうした情勢に通用する労働運動とりわけ闘う労働運動の全国ネットワークの本格的な発展をかちとることができるかどうかが、とくに国鉄闘争のなかにそのような質と路線を確立することができると明かした。動力千葉にとっては、二十周年を契機とした飛躍と、九九春闘や統一地方選そしてゆらぎ始めたJR体制との闘いに全力で打ちあがることを訴え、当面する国鉄闘争・ガイドライン闘争などの取り組みを提起した。

## 九九年は歴史的な年

続いて経済評論家村越一郎氏が以下の講演を行なった。

村越氏は九九年があらゆる意味で歴史的な年になることは間違いないとして、情勢に対する認識、時代認識の重要性について強調した。いま私たちは、戦後50年生きてきた人生の中で一度も経験したことのない情勢に立ち向かっている。世界経済がアメリカ経済を先頭に大きく世界大恐慌に入り始めている。それは資本主義・帝国主義の危機、資本主義の行きづまりとしてあらわれている。資本の利潤の追求を社会の絶対的基準にした仕組みが、利潤をあげられなくなってきた。それは高度成長期とは様相が一変していることからも明らかであり、これまでの社会の約束事をつぎつぎに資本の側が踏み破って、労働者への攻撃が激化してくる。

支配階級は、政策によって解決できない行き詰まりを暴力的に解決しようとしている。対外的には国家という形で軍隊で武装し、外にむかって戦争という暴力的手段で危機を突破しようとしている。「読売新聞」の一月一日付けの「社説」は歴史的といえる。これまでの新聞の「中立性」をかなぐり捨て、戦後民主主義を攻撃し、憲法「改

正」を組上にのせるべきと主張し始めた。これなど今日の情勢の反映の最たるものだ。これまでの戦後の価値観の全面的破壊、労働運動・労働組合の破壊など、資本主義という社会体制そのものが行き詰まり、並みのものでは生き延びられないというなかで、資本主義の本質をむき出しにした暴力的姿を赤裸々にして

いるのだ。だが問題を原則的に立てると、資本主義社会と言えども、社会が成り立つためにはその基礎に人間の労働がある。労働の担い手は労働者、労働者がいなければ社会は成り立つ。資本家がいなくても社会が成り立つこと明らかにしたのはマルクスだ。資本主義社会だけが社会ではない。資本主義の危機が歴史的に訪れている。これは大きな新しい歴史にむかっている絶好の情勢の到来だ。こういう時代だからこそ問題を根本的なところで見ると、鮮明にはつきりする。

## 大恐慌の情勢の到来

今日の情勢の最大の特徴は、全世界が一九二九年以来の世界大恐慌の情勢に入り始めているということ。そして二九年に起きたことが、いま日本でも同じことが起きている。特に日銀の経営危機です。山一証券や拓銀の破綻の時、日銀特融を行い無制限・無期限・無利子の融資を

行い、信用危機をくいとめたがこれが今日日銀危機をまねいている。政府は一年の国家予算に匹敵する税金を銀行救済につきこんだが、政策の限界にきている。今日の情勢の激動をもう政策で解決できると考えていない。いままでのやり方を変えようと政治家が本気で考え始めた。資本家に無制限で貸し出し、穴は税金で埋める。だが財政赤字は解消されない。行きつく先は国家的破産であり戦争しかない。日本の資本主義がそこへ走り始めている。富士重、三菱、日立、日産など戦後の一流企業はみな軍需産業だった。経済が行き詰まったから「本業」にもどろうと基幹産業が一斉にカジを切るなかで、中島代議士事件など色々な事件が起きている。世界中でこの「転換」が始まっている。

最後に労働運動も問題を基本的なところに据えて考えてほしい。労働者が労働者の要求を掲げることは無意味なのか。決してそうではない。国鉄闘争がなければ今日の労働運動はどうなっていたか。原則を曲げずに貫くこと、労働者は闘わなければ生きていけない。闘う労働組合のネットワークを作って階級的団結を強めることが重要になる。あたりまえのことをあたりまえと言いつつ、労働者が労働者が確信をもって正しいと言いきれる論理、労働者の論理をつかみとろう。(文責・編集委員会)